

令和元年6月12日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02805

研究課題名(和文) 認知言語学・用法基盤モデルの観点からの第一と第二言語習得に関する実証的研究

研究課題名(英文) An Analysis of First and Second Language Acquisition from a Usage Based Model of Cognitive Linguistics Perspective

研究代表者

橋本 ゆかり (HASHIMOTO, Yukari)

横浜国立大学・教育学部・教授

研究者番号：40508058

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：認知言語学・用法基盤モデルの観点から、日本語を第二言語とする成人と子ども、日本語を第一言語とする子どもの3者間の共通性と差異を明らかにする。3者の共通性からは言語習得のメカニズムを提案し、その妥当性を示す。差異からは、言語習得のプロセスに影響を与える外的および内的要因を明らかにする。研究から得られた成果は教育現場に応用し、教育方法や教材を考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、世界的議論の的となっている固まり学習が文法ルール獲得に繋がるのかという問題について明確な答えを実証的に示す。現在注目されている認知言語学の用法基盤の理論を、日本語の第二言語習得に援用するという試みは、世界規模の理論的貢献といえる。膠着言語である日本語において橋本独自の言語構造構築メカニズムの仮説を提示しており、国内外に問う必要がある。

本研究では、日本語を第二言語とする子どもの実態を明らかにしている。グローバル化に伴い増え続ける外国からの参入者にスポットライトを当てていることから、言語支援の必要性をより説得力のある形で提案することができる。

研究成果の概要(英文)：From a cognitive linguistics perspective, I clarify the acquisition process and mechanism and indicate similarities and differences among adults and children whose second language is Japanese and children whose first language is Japanese in order to identify universal language acquisition processes and the internal and external factors that affect those processes. I apply the second language acquisition mechanisms identified in actual education.

研究分野：第二言語習得 認知言語学 日本語教育

キーワード：用法基盤モデル 認知言語学 外国人児童(外国につながる子ども) 日本語を第二言語とする大人と子ども 第一言語習得 固まり スロット付きスキーマ ピボット・スキーマ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

海外の第一言語(以下、L1)および第二言語(以下、L2)習得研究において、学習者が固まりのまま丸暗記した表現(以下、固まり)がルール獲得に繋がるのかというテーマは1960年代以降、著しい変遷を経て今日も尚白熱した議論が続いている。日本語の習得研究においては、固まりのままの産出が報告されているものの、どのように文法ルール獲得へと結びついていくのかについては未だに明らかにされておらず、そのメカニズム解明において実証的な様相の究明が待たれている。

近年、英語のL1習得研究において提唱された言語習得理論である認知言語学の用法基盤モデルが注目されている。その基盤となる考えは、インプットを外部から固まりで取り込み、それらをデータとして蓄積し、抽象化のプロセスを経てスキーマを獲得するというものである。スキーマとは、知識を過去の経験に基づいて抽象化し構造化することによって鋳型・規範の状態に組み替えられた知識のあり方を言う。Tomaseillo(2003)においては、1語をピボット(軸)にしたピボット・スキーマの生成の段階をルール獲得プロセスの1段階に位置づけている。固まり習得に関連する先行研究から明らかになった問題点は、次の3点で、固まり習得との関係、何を中心にまたどのように知識の組織化が進んでいくのか、L1とL2習得の違いはあるのか、である。この観点から習得プロセスを精査することにした。さらに類型論的に異なる言語の習得は異なるのかといった観点も加えて研究を行った。

L2習得研究は、主にL2学習者に対する教育法を追究したいという理由により1960年代後半から発展したもので、成人対象の研究が多かった。L2習得にL1習得研究の知見を援用する際、L1習得とL2習得の違いの他にも、年齢や認知能力の差といったさまざまな要因が存在している。そこで、年齢及び認知的発達レベルにおいてL1に近いL2児も含めL1児・L2児・L2成人において調査を行い、その結果を比較検討することに意義があると考えた。L2習得であるが年齢差がある場合はどうか、年齢は近いがL1習得とL2習得の違いがある場合はどうかといった具合に、ある程度要因を絞り習得プロセスの共通性と差異を検討することで、トライアングルーション式に習得メカニズムの解明に迫ることができると考え、その方式を採用することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、認知言語学的観点より、日本語のL1とL2習得のプロセスとメカニズムの両方を明らかにすることである。まずは、これまで研究があまり進んでいないL2児に焦点を当てて習得プロセスの全貌を明らかにする。さらにL1児、L2成人の習得プロセスをも明らかにし、比較を行う。最終的には、L1児・L2児・L2成人と3者間で比較し、共通する普遍的部分と可変的部分を見極める。領域固有の習得プロセスを明らかにしつつ、普遍的な言語構造構築メカニズムの解明を目指す。普遍的な部分については、認知言語学の用法基盤モデルの概念を援用することで提案した言語構造構築メカニズム「スロット付きスキーマ合成仮説」(橋本2008等)の妥当性を検討する。

研究は文法カテゴリーごとに進めるが、課題は次の5つである。課題1)L2児の習得プロセスを明らかにし、「スロット付きスキーマ合成仮説」の妥当性を検討する。課題2)L1児の習得プロセスを明らかにし、「スロット付きスキーマ合成仮説」の妥当性を検討する。課題3)L2成人の習得プロセスを明らかにし、「スロット付きスキーマ合成仮説」の妥当性を検討する。課題4)L2習得に必要な教育環境を明確にし、教育方法および教材を考える。

3. 研究の方法

長期にわたるフィールドワークにより収集したL2児とL1児の発話データを用いる。観察、数量的及び記述的分析といった複合的手法による。

L2成人については、公開コーパスを用いる。

教育現場に入り込み、観察とアンケートなどを行う。

4. 研究成果

本研究においては、理論的背景および本研究の意義を明らかにし、これまで研究を行っていない文法カテゴリーあるいは対象者について研究を進め、言語構造構築のメカニズム「スロット付きスキーマ合成仮説」の妥当性を得るとともに、L1児、L2児の2者間、そしてL2成人も加えた3者間の共通性と差異を明確にした。以下のとおり研究を進め、成果を得た。

(1) 研究の理論的背景である認知言語学の用法基盤モデルについて論文執筆を行った。

認知言語学の用法基盤モデルについて、その背景と特徴、加えて研究に援用する意義についてまとめた。主な観点は2つとした。第一に、用法基盤モデルとはどのような言語習得理論なのか、他の理論とどういった点で異なるのかということ、用法基盤モデル誕生の背景を説明することで明らかにした。第二に、用法基盤モデルをL2習得研究にどのように応用できるのかを述べた。この論文を執筆することで本研究の位置づけをより明確に示した。

(2) L2児の助詞「に」「で」の習得プロセスについて学会発表および論文執筆を行った。

本研究では、まずL2児の場所を表す「に」と「で」の習得プロセスを検討した。場所を示す「に」と「で」の習得プロセスについては、固まり学習のみられる段階が初期にあり、次に「に」

を「で」の使用域にまで過剰般用してしまう段階があり、最終的に規範的使用の段階に至ることが確認された。「に」の過剰般用からは、場所の「に」の習得が「で」よりも早いことが考えられた。次に、場所以外の意味を表す「に」も含めて検討し、「に」の習得プロセスを探った。名詞と助詞、助詞と動詞という多様なレベルの固まり学習が知識の組織点となっていることが明らかになった。「に」の習得プロセスを探ることで、構文(パターン)と、抽出された助詞の核的意味に基づく過剰般用とが混在した多元的かつダイナミックなものであることが明らかになった。加えて、L2 児が「に」の中心的意味として「密着性」を抽出している可能性が考えられた。本研究で明らかになった「で」よりも「に」の習得が早いのは、「に」の「密着性」という意味要素に関係することが考えられた。子どもは here and now (今ここ) から習得を始め、具体性のあるものから習得する傾向がある。「密着性」はこういった意味でも認知的に易しいと考えられ、多義の習得の方向性に影響を及ぼしたことが考えられた。本研究では、L2 児の「に」の習得プロセスについて、固まりと「スロット付きスキーマ」(橋本 2011) の概念を用い、さまざまな習得プロセスの諸相を明らかにした。

(3) L2 児の助詞の習得と統語の発達との関係について図書を出版した。

L2 児の研究の重要性を、日本社会の現状を説明した上で指摘した。さらに用法基盤モデルに基づいて、L1 児が具体事例を蓄積し抽象化することでスキーマを生成すること、そして、語結合に始まり、ピボット・スキーマ、アイテムベース構文の段階を経て抽象度の高い構文に辿り着くことを説明した。あわせて用法基盤モデルを日本語の L1 および L2 習得研究に援用した「スロット付きスキーマの合成仮説」(橋本 2011) を紹介した。その中で用法基盤モデルの日本語における応用可能性を示すとともに、英語とは異なる日本語の特徴も配慮しなければならないことを指摘した。日本語の統語標識である助詞に焦点を当て、L2 児のこれまでの研究を振り返り、課題を整理した。助詞については、過剰般用期を経てどのように規範的な使用へと近づいていくのかを、他の語彙や文法との関係性も含めて調査する必要がある。同じ音で複数の異なる意味を持つ助詞は、意味ごとに別々に識別され異なる習得プロセスを辿り、そのまま別の知識として脳内で記憶されるのか、あるいは最終的には1つの助詞の意味として統合されるのか、それとも初期は助詞の核となる意味を1つだけ学習し、その後意味の細分化を行うのか、などを検討する必要がある。日本語の構文は語順と格助詞の両者が補い合いながら形成されていく可能性を本研究では指摘したが、語順と格助詞に関する2種類のスキーマ的知識がどのように相互作用しながら構文や統語知識を確立させていくのかについても綿密に調査する必要がある。「助詞+動詞」の固まり学習についても、動詞ごとの知識が「名詞+助詞」のような名詞句の固まり学習を起点とした知識とどのように統合していくのかも検討する必要がある。今後は、本研究で明らかになった知見を踏まえて、言語構造構築の全体像を明らかにするために研究を進めていく。

(4) L2 児の複雑な構造の習得と L1 幼児との違いについて図書を出版した。

橋本(2011)においては、L2 児の動詞形と助詞に焦点を当てて研究をまとめ図書を出版したが、本図書では、述語形、複雑な構造をもつ文(呼応形態を有する文)さらには複文構造に注目し、言語構造のプロセスを明らかにするために、次の研究成果をまとめて結論を提示した。

L2 児の否定形式の習得プロセスと L1 児の習得プロセスとの比較

L2 児の願望形式の習得プロセスと L1 児の習得プロセスとの比較

L2 児の疑問詞を使用した全部否定形式の習得プロセスと L1 児の習得プロセスとの比較

L2 児の理由を表す接続助詞と接続詞の習得プロセスと L1 児との比較

これらの研究結果を統合することで、語、句、文、複文といったどのような大きさの構造であっても、同じ認知処理の原理でメカニズムを説明することができることを示した。語内の語基側と接辞側(否定形式、願望形式といった述語形)文内の疑問語側と述語側(全部否定表現形式といった複雑な文構造)文(理由表現形式の複文構造)といったどのレベルにおいても、スキーマの生成と分離、そして合成と相互作用といった認知的操作が介在していることを明らかにし、「スロット付きスキーマ合成仮説」の妥当性を示した。加えて L2 児の習得プロセスには L1 児にはない段階が多くあることを多様な文法カテゴリーの習得において示した。

(5) 可能形習得プロセスにおける L1 児、L2 児、L2 成人の共通性と差異について図書を出版した。

本研究では、L1 児、L2 成人、L2 児の可能形式の習得順序が年齢や L1 か L2 かの違いがあっても同じなのか、あるいは違いによって異なるのか、そしてそれはなぜなのかを明らかにした。L1 児、L2 成人、L2 児に共通する点として、主に2つのことが指摘できた。1つ目は、インプットに基づいて可能標識をピボットにした「スロット付きスキーマ」(橋本 2011) が生成されることで可能形式の習得が進んでいくことである。学習者は「スロット付きスキーマ」のスロットに多様な言語ユニットを入れ、その適格性を検証しながら習得を進めていた。2つ目は、L1 児、L2 成人、L2 児とも、可能標識の無いものから有るものへ、そして活用の不要な形式から必要な形式へ習得が進むことであった。年齢に起因する違いとして、次のことがわかった。L1 幼児と L2 幼児は「れる」形式から「られる」形式へ、その後「ことができる」形式へと習得を進める点で共通し、L2 成人は「られる」形式と「ことができる」形式を比較的早期に産出

した。教室学習の L2 成人の場合、教室におけるインストラクションが知識の組織点となることが明らかとなった。3 者の共通性からは言語習得メカニズムという普遍的な部分を示し、これをもとに指導方法を考える必要性を指摘した。

(6) 外国に繋がる L2 児の実態、望ましい環境、教育について学会発表、講演会および論文執筆を行った。

外国に繋がる L2 児の小学校におけるパネルディスカッションを分析し、その効果と実態について学会において発表した。

外国に繋がる子ども L2 児の作文を L1 児と比較することでリテラシーの発達を明らかにし、研究会で発表した。

研究成果をもとに提案した漫画教材と多義語教材を教育現場で実践したり、講演会で紹介したりした。アンケートなどをもとに実践の効果を学会において発表し論文化した。

外国に繋がる L2 児の支援者のために、外国に繋がる L2 児のおかれている環境を分析し、教育方法について図書にまとめ出版した。

外国に繋がる L2 児を学校で教育する教師のあり方について分析し、学会において発表した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 4 件)

橋本 ゆかり(2019 予定)「多義語類推タスク活動 の実践 - 認知言語学・用法基盤モデルから考える教材」『BATJ ジャーナル』査読有、20 号、英国日本語教育学会

橋本 ゆかり(2018)「用法基盤モデルとピア・ラーニングの理論から年少者日本語教育の教材を考える」『ヨーロッパ日本語教育』発表前査読有、21 号、554-556 ヨーロッパ日本語教師会

<https://www.eaje.eu/ja/symposium/35>

橋本 ゆかり(2017)「認知言語学用法基盤モデルの誕生の背景からみる特徴と第二言語習得研究への応用」『国語研究』査読無、35 号、17-29

橋本 ゆかり(2016)「ある仏語母語幼児の助詞「に」「で」の習得についての一考察 用法基盤モデルを援用して」『日本認知言語学会論文集』発表前査読有、16 巻、488-494

[学会発表](計 16 件)

橋本 ゆかり(2019)「さらにその先にある研究の方向性と道筋」第 2 言語習得研究会(関東)講演 お茶の水女子大学

橋本 ゆかり(2018)「外国に繋がる子の視点から考える教員養成」平成 30 年度横浜国立大学教育横浜国立大学シンポジウム『外国に繋がる子の支援 - 教員養成学部 to 期待されること -』講演 横浜国立大学

橋本 ゆかり(2018)「認知言語学・用法基盤モデルから考える多義学習教材 - 類推能力を活用した学習 -」BATJ (The British Association for Teaching Japanese for a foreign language) 英国日本語教育学会) 年次大会 ポスター発表 プリントン大学

橋本 ゆかり、窪津 宏美(2018 共同)「言葉の壁を乗り越えて対話から生まれるもの - 多文化化する小学校における「子どもパネルディスカッション」の効果 -」日本語教育国際研究大会 ポスター発表 イタリア、ヴェネチア カ・フォスカリ大学

橋本 ゆかり(2017)「用法基盤モデルを活用した教育 - 漫画を中心とした活動 -」SLA 理論をベースにした日本語文法教育ワークショップ 講演 国際基督教大学

浜田 麻里、齋藤 ひろみ、南浦 涼介、市瀬 智紀、河野 俊之、橋本 ゆかり、上田 崇仁、川口 直巳(2017 共同)「教員養成学部学生の「日本語指導」に関する認識 - 外国人児童生徒等教育にあたる教員養成の充実のための前提条件を探る -」教大協研究集会 口頭発表 愛知教育大学

橋本 ゆかり(2017)「用法基盤モデルとピア・ラーニングの理論から年少者日本語教育の教材を考える」第 21 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム ポスター発表 リスボン新大

河野 俊之、金田 智子、川口 直巳、齋藤 ひろみ、橋本 ゆかり、浜田 麻里、南浦 涼介(2017 共同)「現職教員の「日本語指導」に関する認識 - 「多文化教員研修」の検討に向けて」第 38 回異文化間教育学会大会 口頭発表 東北大学

橋本 ゆかり(2017)「言語習得のメカニズムから考える外国人児童のリテラシー発達 - 理由表現に焦点を当てて -」多様な言語文化背景をもつ子どもたちのリテラシーフォーラム 4 口頭発表 聖心女子大学

浜田 麻里、市瀬 智則、齋藤 ひろみ、南浦 涼介、河野 俊之、橋本 ゆかり、上田 崇仁、川口 直巳(2017)「多文化教員のカリキュラムを考える」多文化教員養成フォーラム 口頭発表 学習院大学

浜田 麻里、市瀬 智紀、齋藤 ひろみ、南浦 涼介、河野 俊之、橋本 ゆかり、上田 崇仁、川口 直巳(2016 共同)「外国人児童生徒に対する指導に対応できる教員を養成する」平成 28 年度日本教育大学協会研究集会 ポスター発表 富山県民会館

橋本 ゆかり(2016)「年少者「多文化教員」に必要な能力とは何か - 小中高等学校現職教員

〔図書〕(計 5 件)

橋本 ゆかり 他 (2019 共著) 野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語習得研究』
くろしお出版、167-187

橋本 ゆかり (2018)『用法基盤モデルから辿る第一・第二言語の習得段階 - スロット付きスキーマ合成仮説が示す日本語の文法 - 』風間書房、総 196

橋本 ゆかり 他 (2017 共著) 岩立志津夫・小椋たみ子編『よくわかる言語発達 改訂新版』
ミネルヴァ書房、78-79

橋本 ゆかり 他 (2016 共著)『第二言語としての日本語習得研究の展望 - 第二言語から多言語へ』ココ出版、295-322

橋本 ゆかり 他 (2016 共著)『教えよう 日本語』凡人社、総 170

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 <https://dr-yukari-hashimoto.jimdo.com/>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号 (8 桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：